なんとかなる本

The Book of Can-Do

樹本図書館のコトバ使い⑤

もくじ

一冊目

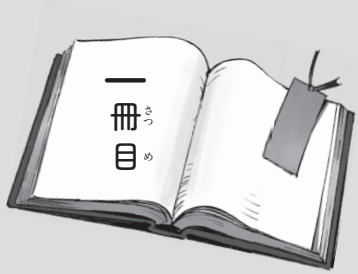
キレコワになりたくないさんと現心のコトバ……5

二冊目

はっきりできないさんと育花のコトバ……53

三冊目
自分時間がほしいさんと気報のコトバ……95
四冊目
友だちを信じたいのにさんと不信のコトバ……141
葉飛の樹本図書館日誌……186

——あなたは今、なんとかしたいことがありますか？



キレコワになりたくないさんと現心のコトバ

ダンは走りながら、ずっと心の中でさけんでいた。

（もうイヤだ！　なんでみんなぼくに気持ちを聞いてくるんだ？　どうせなにを言っても、怒ったり、まちがってるって言ったりするくせに！）

――わけもなく、どなったりしないでしょ？　なにか理由があるはずよね？　安住くんの気持ちを教えてくれるかな？

五年一組担任の、神原先生にさっき言われたコトバがよみがえる。

――なんでも言っていいのよ。先生、怒らないから。

そうせまられたら、ますますコトバが出なくなる。

――なんでだまってる！

――どうしたいの？　どうしてなにも言ってくれないの？

ゆうべ、お父さんとお母さんに言われたこともよみがえってきた。先生と両親の声が、頭の中でひびき合い、わんわんこだまする。

（ぼくの気持ち？　なにを考えてるかだって？）

胸の中でうずまくのは、どろどろしたイヤな感じのもの。コトバにするとしたらムカムカ、イライラ、それから？　もどかしすぎて頭の中でバチバチと火花が飛ぶ。

（無理だ！　コトバになんかできないよ！）

「うわああ！」

ダンはたえられなくて、大声でさけんだ。そして、おどろいて息をのんだ神原先生を残し、教室から飛び出したのだった。するとろうかのつきあたりに、真っ赤なものが落ちているのが見えた。

ダンはドキッとして立ち止まり、そろそろとその赤いものに近づいた。

（これ、本じゃん！　こんなでっかい本、あるの？）

それは教室のつくえを二つならべたぐらいの大きさだった。消防車みたいに目立つ赤い色の表紙に、『**なんとかなる本**』というタイトルがチカチカと信号みたいに点滅している。

（なんかヤバそうだな、これ。）

そう思ったとたん、本の表紙がぶわっと開いて、最初のページが目に入った。
そこには太い文字で一行だけ、こう書いてあった。
――あなたは今、なんとかしたいことがありますか？
ダンは、それに答えるようにさけんだ。
「あるよ！　今すぐ、ぼくをなんとかしてくれよ！」
するとその本は、開いたページを、ろうかいっぱいに長く広げた。そしてくるくるとはしから丸まって、ダンの体を巻き取った。ダンは悲鳴をあげた。
逃げようともがいたけれど、のばした腕はスカッと空をきった。

（あれ？）
なぜか学校のろうかではなく、がらんと広い場所にいた。
うす暗さに目が慣れてくると、背の高い本棚がずらっとならんでいるのが見えた。
（本がいっぱい……図書館？　でも、ここが学校の図書館なわけないよな。）
ふり返ると、真後ろにきみょうな木が生えていた。太い幹から四方にのびた枝の先

には、さまざまな大きさの果実……よく見たら全部本の形をしている……が実っていた。

（さっきのでっかい赤い本の仲間？　だったら、この木もおそってくるかもだぞ！）

「その本の樹は、危険なものではありませんよ。ご安心を。」

だれかの声が、すぐ近くからした。横に女の子が立っていた。めがねをかけて髪をきつく束ね、大人っぽいグレーのスーツを着ているが、同い年ぐらいだ。

「わたしは、この樹本図書館の司書で、一級コトバ使いの葉飛といいます。お待ちしていましたよ。」

「……待っていた？　ぼくを？」

「はい。さきほど、『なんとかしてくれよ！』っておっしゃいましたよね？」

「言ったけどさ。今、こまっていること、なんとかしてくれるわけ？」

「はい。たいていのことはコトバの力をかりればなんとかなります。」

「は？　コトバの力で？　意味わかんないし！」

顔をしかめるダンに、ヨウヒがたずねた。

「あなたがこまっているのは、コトバのことではないですか？」

言われて、ダンは、ぎくっとした。たしかに、コトバのことでこまっているのだ。

「まずはこまっていることを、教えていただけませんか？　あちらでゆっくり、お話をうかがいますから。」

ヨウヒが、少しはなれたところにある、横長のカウンターを指さした。

自分のことなんか、だれにも話したいと思ったことがない。でも、なぜだかこのヨウヒという子は、どんなつまらないことでも、バカにせず、聞いてくれそうな感じがした。ダンは、すすめられたカウンターの前のいすにすわって、話し始めた。

ぼくは……、家ではあんまり話さない。

三つ年上のシン兄ちゃんはなんでもできる。勉強もできて、話もおもしろい。中学で友だちと盛り上がった話や、模擬試験であせった話、シン兄ちゃんが話し出したら、お父さんはニコニコ、お母さんは声をあげて笑う。ぼくが話しても、お父さんもお母さんも、たいしてよろこばない。だから話さないんだ。

学校でも話さないのかって？　いや、そんなことないよ。ちょっとは話す。

「すっげー！」とか「マジか？」をいいタイミングで言ったら、それだけでなんとなくみんなとうまくいく。だから学校は家よりはまだ、居心地がよかった。

……昨日、夕ご飯のあと、お父さんに呼び止められた。

「五年生になって、どんどん成績が下がっているのはどうしてだ。」

もともと国語が苦手だった。長い文章は、わからないコトバが出てきたら、そこでもう、読むのがめんどうになる。ほかの教科も五年生になってから、教科書の文がだんだんむずかしくなってきて、頭に入らない。

でもそれを言ったらどうせ、「それは言いわけで、本気でやる気がないんだ。」ってしかられるだろう。だからだまっていたんだけど。

「このままだったら、もっと勉強についていけなくなる。なんでだまってる！」

お父さんがいよいよ怒り出した。

「ダン、お母さんがすすめてる塾がイヤならほかの方法もあるわ。どうしたいの？　どうしてなにも言ってくれないの？」

お母さんの声もどんどん大きくなる。それでよけいになにも言えなくなって、おそい時間までしかられて。そのあとはぜんぜん、ねむれなかった。だから、気持ちはモヤモヤ、頭はぼんやりしたまま、学校に来たんだ。

「おはよー！　ダン、な、昨日アップされた『うすぎりハム侍（ざむらい）』の動画見た？」

教室に行くと、さっそく天野（あまの）コウキが、好（す）きな動画の話をしてきた。

「……ええと。見てない。」

ゆうべは動画なんか、見る気分じゃなかった。

「なんだよ！　めっちゃウケるのに。うすぎりハム侍、ペラペラでござる‼」

コウキが動画のマネをすると、まわりにいた子たちが、わあっと大声で笑った。

「ダンも、ごいっしょに‼」

「いいって。」

「なんだよ、今日はノリが悪いな！　ほらあ！」

コウキがぼくの腕をぐいっと引っぱったので、とっさにその手をふりはらった。

「うっぜー！」

自分でもびっくりするような大声が出た。みんな、おどろいてシーンとなった。
（しまった！　キレちゃった！）
そう思ったけど、もうおそかった。コウキは、むっとした顔で言った。
「なんだよ、『うっぜー！』はないだろ！」
そこへ神原先生がやってきた。
「安住くんが、急に天野くんにキレて、どなったんです！」
「腕をぶん！　ってふって、天野くんを思い切りふりはらったんです。」
みんな、次々と先生に報告する。
「わけもなく、どなったりしないでしょ？　なにか理由があるはずよね？　安住くんの気持ちを教えてくれるかな？　なんでも言っていいのよ。先生、怒らないから。」
そう言われたけど、返事できるはずがない。どうせなにを言っても終わりだよ。
「安住くん、コワかったよね。」
「キレるキャラだったんだ！　意外。」
ぼくの後ろで、だれかがそう言ってるのが聞こえたからさ。その一言でぼくはもう

「キレコワキャラ」って思われて、クラスのきらわれ者になったんだ。

「それで教室から飛び出したんですね。」

カウンターをはさんで話を聞いていたヨウヒが、そう言った。

「ダンさんの場合は、自分の気持ちをどうコトバにしたら相手にうまく伝わるかがわからないから、話しづらいんだと思います。落ち着いて本当の気持ちを伝えたら、キレてコワイ人とは、だれも思わないでしょう。」

「それはそうかもだけど、でも、そんなの、ぼくにはできないよ！」

「だいじょうぶ。今からダンさんが、自分の気持ちをうまくコトバで相手に伝えられるようになる術をかけます。」

「術って？　ぼくに魔法をかけるってこと？」

ヨウヒはうなずいてすわり直すと、カウンターの上で指を動かし始めた。そこにはなにもないのに、透明な辞書のページをぱらぱらとめくっているかのようなしぐさだった。

「やはり、これがいいですね。」

ヨウヒはぴたりと手を止めると、そうつぶやいた。

「ダンさん、そのまま、じっとしててくださいね。」

そう言うと、ヨウヒはダンの顔の前ににぎった両手を上げ、ぱっと開いた。

左手に「現」、右手に「心」という字が、くっきりとうかび上がっている。

「現心（あらわすこころ）のコトバ！　なんとかしてください!!」

ヨウヒがさけぶと、手のひらから「現」と「心」の文字が、ぽんと飛び出してきた。その二文字は、カウンターの上でぴょんとはねると、ダンの左手に飛びついた。あわててはねのけようとしたが、二文字はダンの手の中にもぐりこみ、すがたを消した。

「今のなに？　なんか手に入ったよ！」

「これから、気持ちをだれかに伝えたくなったら、左の手の甲を見てください。そうしたら、あなたの気持ちがみんなにわかるコトバになってうかび上がります。」

「ええ？　それって翻訳アプリみたいなもの？」

シン兄ちゃんがスマホで便利に使っているのを、見たことがある。

「はい、左手に『気持ち翻訳アプリ』が入っていると思ってください。」

ヨウヒは、さらにこう言った。

「コトバの力をかりてがんばれば、きっと、うまくいきますよ。」

（あ、れ？）

気がついたら、ダンはもといた学校のろうかに立っていた。目をこすってあたりを

見たが、ヨウヒのすがたも、『なんとかなる本』も、なかった。

（……なんだったんだ？　ぼく、立ったままいねむりしてて夢でも見たのかな？）

はあっとため息をついて、その場にしゃがみこんだ。

「安住くん！」

神原先生がろうかの向こうからかけよってきた。

「気分が悪くなった？　だいじょうぶ？　保健室に行こうか？」

神原先生は、いきなり教室から飛び出したダンを、とても心配しているようだった。先生のあせだくの顔を見たら、ちくっと胸がいたんで、うつむいたとき。

（あ！）

左手の甲に、文字がうかび上がっているのが見えた。小さな字だが、ボールペンで書いたみたいにはっきりとしたこい字で、全部がすぐに読み取れた。

「気分は悪くないです。急にさけんで、びっくりさせてごめんなさい。」

ダンは思わず、そこに書いてある文をそのまま読み上げた。

すると神原先生は、ほっとしたように、ほほえんだ。

「体調が悪いわけではないのね。先生、安住くんの気持ちを知りたくて、いきなりいっぱいたずねすぎたかな。先生もごめんね。」

（これ、ヨウヒが言ってた、『気持ち翻訳アプリ』？　術、本当にかかってる！）

ダンの手の甲に現れる文字は、先生には見えないようだ。

「ゆうべ、ぜんぜん寝られなくて、シンドくてぼんやりしてて。そこに天野くんが、動画のマネをしようって、腕を急に引っぱったから、びっくりしてついふりはらってしまったんです。すぐにあやまりたかった。でも、言い出せなくて。」

ダンは気持ち翻訳アプリの文を読みながら、感心していた。

（そうそう、そうなんだよ！　こういう

ことが言いたかったんだ。）

「そうだったのね。じゃあ、天野くんとまずは仲直りをしたら？　今、先生に言ったことを天野くんに言ったら、きっとわかってくれるわ。」

「……はい。」

そこで授業が始まるチャイムが鳴った。

（コウキにちゃんと話せるかな。いつ、話しかけよう……。）

ダンはドキドキしながら、国語の授業を受けていた。すると神原先生がコウキを名指しした。

「天野くん。この漢字はなんと読みますか？」

そうっとようすを見ると、ダンのななめ後ろの席でコウキは、首をひねっていた。

（コウキも国語、苦手だもんな。）

先生が黒板に書いた、その文字は「現」だった。

（あの字！　さっき術をかけたときに出てきた字だ！　ヨウヒは言ったぞ。「現心の

コトバ！　なんとかしてください‼」って。あの字は「あらわす」だ！）

ダンは自分のノートに大きな字で「あらわす」と書き、さりげなくコウキに見せた。コウキはダンのノートに気がついて、目を丸くしたが、

「あ、わかった！　思い出した。『あらわす』です！」

と、すぐに元気よく答えた。すると神原先生は、うれしそうに言った。

「新しく習う漢字を、よく読めました。天野くん、ちゃんと予習してきたのね。」

「アハハ、こう見えて漢字得意かも！　漢字王にオレはなる！」

調子よくコウキが言って、クラスのみんながどっと笑った。

「さっきはありがとうな。ダンのおかげで先生にほめられちゃったよ！」

国語の授業が終わるなり、コウキのほうから話しかけてきた。ダンは、ほっとした。

（よかった！　コウキのきげんが直ったんだったら、めんどくさいことを話さなくても、いつものノリにもどれるかも。）

「でもさ、今ので今朝の態度はチャラにならないからな！」

いきなりコウキが、きびしい顔でそう言った。おそれていたコトバを投げつけられ

て、ドクンとダンの心臓がはね上がった。

「ダン、本当は、ぼくと遊ぶのイヤだったの？　それならいきなりキレないで、そう言えよ。」

　コウキのとがった声が教室にひびき、みんなの話し声がぴたっと止まった。ぴんと空気がはりつめ、まわりにいた子たちが、ダンのほうを見た。

「なあ、なんとか言えよ。」

　コウキが言うと、ほかの子たちもざわつき出した。

（やっぱりダメだ！　ちゃんと気持ちを言わなきゃ！　気持ち翻訳アプリ、たのむ！）

　すがる気持ちで、左手の甲にうき上がってきた文章を必死で読み上げた。

「コウキと遊ぶのがイヤなわけない！　ぼくはコウキと遊べるから、学校に来るのが楽しみなんだ！」

　コウキが「えっ。」と声をあげて、ダンの顔をまじまじと見た。

「そうなの？　だったらなんで『うっぜー！』なんて言ったんだよ。」

「ゆうべ、家で親にめっちゃ怒られて。モヤモヤしてぜんぜん寝てなくて。でもイヤな気分だったからって、コウキにひどい態度とったのは、よくなかった。すぐにあやまりたかったんだけど、どう言えばいいかわからなくて。ごめんなさい。」

最後の「ごめんなさい。」は、ひときわ大きな声になった。

（今日はみんなと話せて、本当によかったな……。）

ダンは、自分の部屋でコウキたちと話したことをしみじみと思い出していた。

ダンがあやまったことで、コウキはあっさりゆるしてくれた。そのあと、親になんで怒られたの？　と、アユムが聞いてきて、ダンは今までのこと……成績が下がって、両親にすごく怒られたことや、しかられればしかられるほど返事ができなくて、それでまた怒られてしまうことを話した。コウキもアユムもライトも、何度もうなずいた。

「わかるわー、それ。」

「あるあるだよね。親の『怒らないから言いなさい。』っていうの。」

「で、正直に答えたら、もっと怒られるパターン！」

三人のコトバを聞いて、ダンはびっくりした。

（そういうのって「あるある」なんだ！　ぼくだけかと思ってた。……それなら、勉強のことも三人に言ってみようか。）

「ぼく、長い文読むのキライでさ。国語が一番苦手なんだけど、ほかの教科も文が長いと、問題文を読むのもイヤなんだよね。むずかしいコトバが出てきたら、そこでわからなくなって。それでできる問題がどんどんへってきてるんだよ。」

「でも、ダン、コウキに漢字の読み方教えたじゃん。漢字の勉強はしてるわけ？」

アユムが聞いてきた。

「それは『あらわす』っていう字だけ、たまたま気になって、覚えてたんだよ。」

「それって実は、ダン、本気出したら漢字が得意な人じゃない？」

ライトが言った。

「え、まさか！」

「だって、『現』の字に興味を持って覚えてたわけだよね。ほかの字もそんな感じで

覚えられるんじゃない？　漢字だけでも本気で勉強すれば、けっこう点数取れるよ。国語は成績アップまちがいなし。」

四人の中で一番成績のいいライトにそう言われると、説得力があった。

（……漢字の練習、ちょっとだけしてみようかな。）

ダンは、自分のつくえに向かって漢字の練習帳を開いた。

ページをめくっているうちに「現」の字を見つけた。

「『月が現れる（あらわ・れる）』『すがたを現す（あらわ・す）』か、ふうん。」

（「現心」のコトバの術って、心を表に現す術ってことなのかな……。たしかに、この左手の気持ち翻訳アプリを使えば、ぼくの心が文章になって現れるもんな。）

そう思いながら鉛筆で、「現」の字を書いてみる。

（この字、「げん」とも読むんだっけ。「表現」とか。あれ？　表現って、思ったことや考えたことを表に現すってことだよな？　なんか「現心」の術に似てるかも！）

そう気がついたとたん、今までヘンで複雑な形の記号にしか見えなかった「現」や「表」の字が、親しい意味を持って、目に映った。

「あら！」

後ろから声が聞こえた。ふり向くと、お母さんが部屋に入ってきていた。

「ダン、宿題してるの？　いつも言わないと始めないのに！」

「これは宿題じゃないけど、今日習った字で……。」

「復習をしてるの？　まあ、ダン、やっとやる気になったのね！」

お母さんはつくえの横に立つと、漢字の練習帳をのぞきこんだ。

「どうせ練習するなら、書き順もちゃんと覚えたほうがいいわよ。ほら、この字はハネてないわ。トメ・ハネをきちんとやらないと。あ、ここもまちがえてる。」

うれしそうに次々と注意してくる。

（ああ。やる気なくなった。せっかくライトがいいこと教えてくれたのに……。）

がくっとうなだれたら、左手の甲に文字がうかび上がった。

――横で話されると、集中できなくてこまる。勉強中は一人にしてほしい。

ダンはそれを見てはっとした。

（そうだ！　ぼくは、お母さんにこう言いたいんだ！）

ダンは、気持ち翻訳アプリの文を読みながら、気持ちを伝えた。

「……ぼくは横で話されると、集中できなくてこまるんだ。」

するとお母さんが、おどろいた顔をして一瞬、だまった。

「長くてむずかしい文章の出てくる問題は苦手でも、漢字の勉強をしたら、国語の成績が上がるかもって友だちが教えてくれたんだ。だから漢字の練習をしたい。」

「それはいいと思うわ。でもお母さんが言ってるのはせっかく練習するなら……。」

「でもそれは一人で、ぼくのやり方でやりたいんだ！　もう五年生だし。」

ダンはお母さんのコトバをさえぎって言いはなった。お母さんが、息をのむのがわかった。ダンは、とたんに不安になった。

（「あなたのために言ってるのに。」とか、怒られるかも。）

いくら、ダンが自分の気持ちを落ち着いて伝えても、どんどん言い返されたら、もう気持ち翻訳アプリを使って話す気も起きなくなってしまう。

「……もう五年生だものね。一度自分のやり方でやってみたらいいわ。」

お母さんが、ふいにやわらかい口調でそう言った。

「ダンはもともとじっくり考えて答えを出す子だものね。それじゃ、自分で決めたことは、ちゃんとやるのよ。」

そう言って、部屋から出ていった。

（やった！　ぼくの言うことをちゃんと聞いてくれたぞ！）

ダンは、思わずばんざいした。練習帳の「現」という字が、よくやったな！　とほめてくれているような気がした。

このところ、ダンの毎日は「いい感じ」だった。

――一人で、ぼくのやり方でやりたいんだ！　もう五年生だし。

勇気を出して、お母さんにそう言った以上、勉強をやめるわけにはいかない。毎日漢字の練習帳に向かって、短い時間でも必ず予習と復習をした。

続けてみると、漢字の勉強は意外と楽しかった。国語の教科書に、漢字のなりたちを説明した章があったのを見つけて読んでみた。

（へえ、「馬」って、目に見えるそのままの形を字にしたんだ！　本当に走ってる馬

のすがたに見えるかも。意味を組み合わせた漢字もあるんだ。「口」＋「鳥」で「鳴」！　そっか、字を見ただけで鳥がピイピイさえずってる感じがする！）

おもしろがって練習を続けていたら、ライトの言ったとおり国語のテストの点数が上がってきた。文章題も、知っているコトバが増えたぶん、前より落ち着いて解くことができるようになった。

それにコウキたちと、いろんな話で毎日盛り上がっていたら、ほかの子たちも、ダンに気軽に話しかけてくるようになった。

（あのままキレコワキャラのきらわれ者にならなくて、よかったよ。これ、全部気持ち翻訳アプリのおかげだよね。ヨウヒ、本当にありがとう！）

心の中でヨウヒにお礼を言ったその日の昼休み。給食がすんで、コウキたちと校庭に行こうと教室を出た。

うわばきから運動ぐつにはきかえていたら、くつ箱の裏手から声が聞こえてきた。

「小出くんさ、そんなにぼくらとは話したくないわけ？」

気になって声のするほうをのぞいてみた。

（あ、あれ、四年生の子？）

かべに背中をくっつけて、うなだれている男の子がいた。大柄（おおがら）な男の子が二人して、その子に言い立てている。

「なんとか言えよ。なんでなにも言わないんだ？」

「わざと、だまってるんだろ！　イヤなヤツ！」

そのコトバが、自分に投げつけられたみたいに、ひやっとした。

（あの子、ふるえてる。きっと言いたくてもなにも言えないんだ。）

「どうしたんだ？　コウキとアユム、もう行っちゃったぞ？」

くつをはきかえたライトが声をかけてきた。早く行かないと、遊ぶ時間がなくなってしまう。やっといいお天気になったから、ドッジボールをしようと約束（やくそく）したのだ。

（そんなに気にしなくていいさ。担任の先生がなんとかしてくれるだろうし。）

ダンは、ライトといっしょに校庭にかけ出した。しかし胸の中がひどくモヤモヤする。ぬれたぞうきんをおしつけられたみたいな、気持ちの悪さだ。ふと左手の甲を見ると、文章が現れていた。

――いじめられている子を、見ないふりするのはイヤだ。

ダンは、はっとして、立ち止まった。

「ライト、先に行ってて！　あとで行く！」

そうさけんで、校舎のほうに引き返した。くつ箱の前にもどると、大きな声で呼びかけた。

「そこの四年生！」

すると、男の子二人がふり向いたが、それきり、あとのコトバが続かなかった。

（「その子、こわがってる。」「二人でおどかすな。」「やめるんだ！」）

言いたいことがバラバラとうかぶが、どこからどう言っていいか、わからない。

（ダメだ。やっぱり気持ち翻訳アプリの文でないと……。）

左手の甲を見たが、緊張のせいかうかんでいる文章がぶるぶるとふるえてちゃんと読めない。あせがひたいににじんできたとき、二人が同時に、だっと逃げ出した。

ダンは、一人残された「小出くん」と呼ばれていたその子を見た。きゃしゃで色が白くて、目が大きい男の子だ。かべに背中をあずけてぐったりしている。

「……あんなふうに言われたら、なにも答えられないよな。」
ダンが声をかけると、小出くんが、ひくひくっと肩を上下させ始めた。
「ぼく、ぼく……いつも……うまく答えられない。」
ぽろぽろと涙を流しながら、小出くんは言った。
「……返事しないとって思ったら、よけいに話せない。先生もこまった顔するし……ぼくだけ、ダメなんだ。」
ダンは、うんうんと、くり返しうなずいた。
「ぼくもそうだから、わかるよ。」
すると小出くんが目をくりんとさらに大きく開いて、ダンの顔を見た。
「え、本当に？」
「そうだよ。『なにを考えてる？』とか

きつく言われたら、どう言っていいかわからなくて、ずっとイヤな気分だった。気持ちをコトバにできないのは、苦しいよな。」

「……でも、今はいっぱい話してるよ。」

（それは気持ち翻訳アプリを使ってるからだけど。）

そう思って、あれっと気がついた。さっきから、気持ち翻訳アプリを使わずに、自分のコトバで小出くんと話している！　そのとき昼休み終了のチャイムが鳴った。

「昼休み終わっちゃったな。一人で教室にもどれる？　だいじょうぶ？」

「うん……。」

うなずいたものの小出くんは、心細そうな顔つきだった。

「……放課後、もうちょっと話そうか？」

思わずそう声をかけた。すると小出くんは、ぱっと明るい表情になって、うれしそうに何度もうなずいた。

二週間後。その日も、ダンは大急ぎで帰りじたくをしていた。

「おー、ダン、もう帰るの？」
「うん、シュウマくんが待ってるからさ。」
ダンの返事にコウキは、あきれ顔で言った。
「今日も？　そんなに四年生の子と遊んで楽しい？」
「えーとそれは。」
ダンは左手の甲を見ながら、答えた。
「コウキやアユムやライトといるときみたいに、はしゃいだりはできないけど、放っておけない感じなんだ。すぐに落ちこんじゃうし、元気にしてあげたいし。」
「へー！　まあ、がんばれ、ダン兄ちゃん！」
コウキがからかうように言った。
（ダン兄ちゃん、か。）
ダンはくすぐったい気持ちで、五年一組の教室を出た。小出（こいで）くん――シュウマを助けた日から、二人で放課後に話すのが日課みたいになっていた。
話すのが苦手だったシュウマが、日を追うごとに明るい顔つきで、自分の思うこと

をコトバにするようになってきて、ダンはうれしかった。それにダン自身も、シュウマが相手だと、気持ち翻訳アプリを使わなくてもふつうに話せるのが楽しい。

その日シュウマは、大好きなアニメ作品のことを、いっしょうけんめい話した。

「ぼくはそのアニメ、そんなにくわしくないけど、シン兄ちゃんがDVDを全シーズン、持ってたかも。」

なにげなくダンが言うと、シュウマの目がぽんっとはじけたように大きく開いた。

「……いいな、シーズン3、見たいなあ。」

「シン兄ちゃんにたのんだら見せてもらえるかも……日曜日、うちに来る?」

シュウマの住むマンションは、ダンの家のすぐ近くだ。

「……本当? 行っていいの?」

「うん。でも、おうちの人に聞いて、いいって言ったらだよ。」

「おばあちゃんに連れていってって、お願いするよ! わあい!」

そう言って、顔を真っ赤にしてはしゃぐシュウマに、ダンは胸の奥が熱くなった。

(かわいいな。弟がいるって、こんな感じなのかな。)

そして日曜日。

「こんにちは。今日は孫をよろしくお願いします。」

ダンの家の玄関で、シュウマのおばあちゃんが、ダンのお母さんにあいさつした。

シュウマも、はずかしそうにぺこりと頭を下げた。

ダンが、日曜日に四年生の子を家に呼んでいいかと聞いたとき、お父さんもお母さんも、へえっ、とおどろいた。

「べつにかまわないけど。同じクラスの子も、家に呼んだことがないのに、いつのまに下の学年の子とそんなに仲よくなったの？」

ダンは学校で、シュウマがこまっているところに声をかけたのがきっかけで話すようになったと、かんたんに説明した。そしてシン兄ちゃんにたずねた。

「シン兄ちゃんの持ってる『ぼくらのヒーロースクール』のシーズン3のDVD、見せてもいいかな？　シュウマくん、すっごく好きみたいで。」

「ああ、ダンの友だちならいいよ。」

シン兄ちゃんも、こころよくそう言ってくれた。

むかえに来る時間を言って、おばあちゃんが帰ってしまうと、シン兄ちゃんが体を低くして、シュウマに目を合わせ、優しく言った。

「『ぼくヒロ』のＤＶＤを見たいんだよね。ダンから聞いて、用意してるよ。そこのテレビでいっしょに見ようか。」

シュウマはシン兄ちゃんに返事をせず、ダンの顔を見上げて聞いた。

「……ダンくんもいっしょに見るよね？」

（やっぱりぼくがそばにいないと、ダメなんだな。）

「うん、いっしょに見よう。」

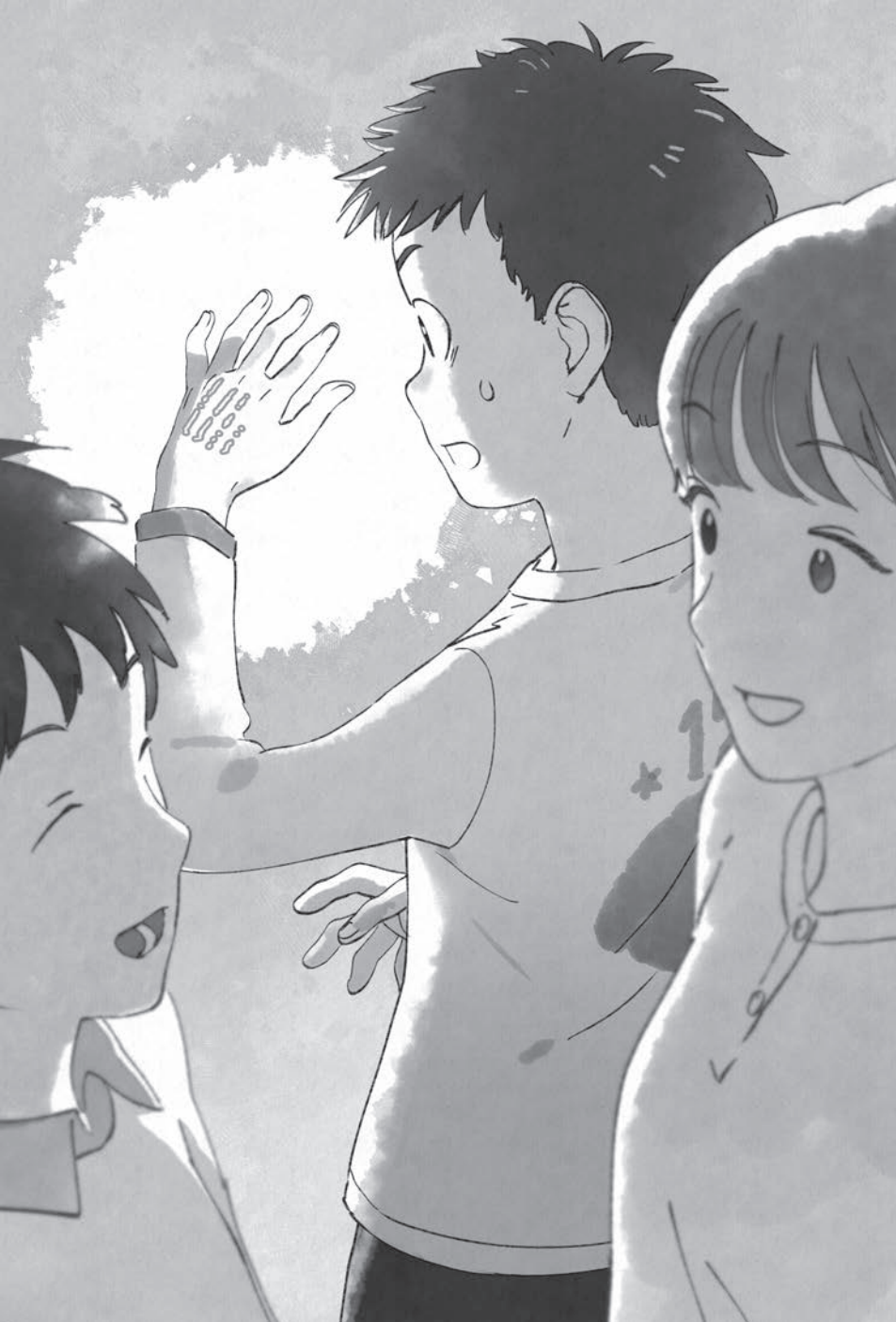
ダンがそう言うと、シュウマはほっとしたようにうなずいた。アニメが始まると、シュウマはすぐに夢中になった。大好きなキャラクターが活躍すると、声をあげてよろこんだ。

「ファイアン、カッコいいよね。ぼくも好きだな。攻撃力では一番じゃないかな？」

シン兄ちゃんが言うと、シュウマがすぐに返事した。

「うん、一番強いのはファイアンだよね。」
「二番目に強いのはビリアかな？」
「そうかも。ビリアは電磁波が使えるし。」
自然にコトバをかわす二人に、ダンはあっけにとられた。
（さっきまでは、ぼくがいないと不安そうだったのに。……いや、大好きなアニメ作品の話だから、夢中になって、いつもよりも調子よく話せているのかな。）
ダンは楽しそうなシュウマのようすに、ほっとすると同時に、だんだんとモヤモヤした気持ちになってきた。もともとそんなによく知らない作品だ。キャラクターの背景や、くり出す技について、熱心に話す二人の会話にとてもついていけない。
それにシュウマはシン兄ちゃんにたずねられると家でのこと、好きな教科のことなどもはきはきと答えた。どれも、初めて聞くことばかりだった。
あっというまにおむかえの時間が来て、シュウマはシン兄ちゃんにかりた、アニメの原作マンガを手に、おばあちゃんといっしょに帰っていった。
「素直でかわいくて、いい子だね。」

シン兄ちゃんが、シュウマが帰るとそう言った。
「本当ね。お行儀もいいし。」
お母さんもニコニコとうなずき、お父さんまでも話に入ってきた。
「シンもおどろくぐらいアニメにくわしかったね。頭のいい子みたいだな。」
(そんなにシュウマくんのことを、みんながほめるなんて。)
ダンは、胸の中に重苦しいモヤモヤがさらに広がるのを感じた。
(なんでこんなに、イヤな気分なんだろ。シュウマくん、あんなに楽しそうだったし、みんなもシュウマくんのことをほめてくれてるのに。それなのに。)
ダンは左手の甲にうかび上がった文章を読んで、ぎょっとした。
――ぼくだけに心を開いていたはずのシュウマくんが、ほかの人にかんたんに心を開いているのを見て、がっかりだ。
(えっ、そ、そんな。がっかりなんてしてないよ!)
すると、その文がさっと消えて、次の文章が現れた。
――シン兄ちゃんやお母さん、お父さんまでがシュウマくんをとてもほめた。ぼくは



そんなにほめられたことがないのに、くやしい。
（シュウマくんにやきもち!?　こんなイヤなこと、ぼくは思ってない!!）
ダンは自分の部屋にかけこんだ。
そのあとも翻訳アプリのイヤな文章は、止まらなかった。
――ぼくだけをたよりにしていると思っていたのに、実はシュウマくんに、たいして信頼（しんらい）されていなかったのかと思ったら、裏切られた気持ちだ。
――シン兄ちゃんはあっというまに、シュウマくんの気持ちをつかんだ。やっぱりなにをしてもシン兄ちゃんにはかなわない。シン兄ちゃんがねたましい。
（ちがう！　そんなこと思ってない！　この翻訳アプリはおかしい!!）
左手の甲を、反対の手で必死にごしごしとこすっていたら、
「ダンのようすがヘンだって、お母さんが気にしてるよ。」
シン兄ちゃんが部屋に入ってきた。ぎくっとダンは、左手をかくした。
「なんだ？　手にケガでもしたのか？」
のぞきこんでくるシン兄ちゃんから、ダンは飛びのいた。

「いいって！　さわらないで！」
「ダン、やっぱりヘンだぞ。見せてみろよ。」
手をのばしてきたシン兄ちゃんに、ダンは、かっとなってさけんだ。
「ぼくのことは放っておいてよ！　出ていって！」
シン兄ちゃんがこまった顔で、部屋から出ていった。左手を見ると、「だれとも話したくない。」「だれもわかってくれない。」「みじめでなさけない。」など、イヤなコトバばかりがすごいスピードで現れては消え、しかも終わりそうにない。見ていると、目がチカチカして頭がいたくなってきた。
ダンは、どさっとベッドにあおむけにたおれ、こう思った。
（……やっぱり翻訳アプリの文は、全部合ってる。シュウマくんがシン兄ちゃんとすぐに仲よくなったのには、ちょっとがっかりした。シュウマくんにも、少しだけ裏切られたような気持ちになったし、シン兄ちゃんにも、正直……ムカついた。）
「つまりぼくは、すごくイヤなヤツなんだ……。」
天井（てんじょう）にはき出したそのコトバは、言ったとたんに自分に向かって落ちてきて、胸に

ずん！　と、するどくささった気がした。